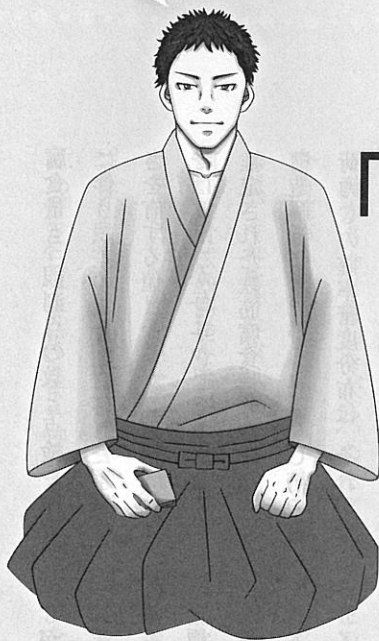


石川は
文学青年でも
あったらしいよ。



「都市探求の都市計画家」石川栄耀

— 都市への愛情と敬意、そして自由 —

盛岡中学在学中に地理学者・小田内通敏の著書を通じて「都市」という人間現象に関心を抱くようになり、仙台で過ごした旧制高校時代に「美しい道路、美しい橋の朗さ、健かさ」に魅かれて東京帝国大学土木工学科に進学することを決めた青年・石川栄耀は、のちに日本の都市計画史上、もっとも影響力のある都市計画家となった。

東京大学 大学院工学系研究科 准教授 中島 直人

もっとも影響力があった都市計画家

今からちょうど100年前、1919年に都市計画法が制定された。内務省は翌1920年から都市計画を専門とする技師の採用を開始した。石川栄耀(1893~1955、1918年東大土木卒)はその最初の年に採用された第一期生である。内務省の都市計画技師として、愛知で13年、東京で10年のキャリアを積んだ。1941年に東京都市に移籍し、道路課長、都市計画課長、そして建設局長を勤め上げた。東京の戦災復興都市計画は石川の理想と経験が凝集された内容で、この計画の解説論文によって母校より工学博士号を授与されている。1951年に建設局長を退任した後は、早稲田大学教授として教育、研究にあたった。石川はキャリアを通じて膨大な数の著作を発表し、「都市計画」を説き続けた。また、都市計画学の確立に心血を注ぎ、都市計画学会創設を主導した。日本の都市計画史上、もっとも影響力のあった都市計画家といっても過言ではない。

ただし、石川は日本の都市計画の保守本流というわけではない。石川と内務省同期採用の榎木寛之(1890~1956、1916年東大土木卒)の最初の赴任地は東京であり、その後も本省の都市計画課主任技師として、全国の道府県から上がってくる都市計画案を技術面から指導した。その間、石川は名古屋において、「都市計画」と云う華々しい名前を有しながら自分達の仕事はどうも此の現実の『都

市』と下コかで縁が切れてる様な気がしてならない」「『盛り場計画』のテキスト 夜の都市計画」「『都市公論』、15巻8号、1932年」という問題意識のもと、地元政治家、商店主、他分野の専門家らとひざを突き合わせながら、さまざまな企み(現在の言葉で言えば「まちづくり」)を実行に移した。榎木は内務省内での都市計画技師の地位向上に尽力し、技師課長ポストを実現させた。一方で石川は、社会における都市計画のプレゼンスの確立に力を尽くした。榎木は長年、東京帝国大学工学部(本郷)で「都市計画」の講義を担当した。石川も東京帝国大学で「都市計画」を教えたが、その舞台は革新、自由な学風で知られた第二工学部(千葉、1942年新設)であった。つまり、榎木が都市計画界の真ん中を歩いたのに対して、石川は常に中心から少し離れたところにおいて、結果として自由に都市計画を思考し、実践することができたのである。

晩年の「内地洋行」

石川の自由を支えていたのは、都市探求の思念であった。石川は戦時中に出版した著書において、「都市の問題にたずさわって既に二十有余年になる。今では膏肓に入って、旅に出ても風景よりは都市を味わう様に偏ってしまった。都市を通じて表現される人々の味がだらかでなつかしいのである。その都市がここに大きく転換せんとするに当面し云い様なき感慨を感じる。都市を失いたくない。」(『皇国都市

「歌舞伎町」の
命名者は
都市計画の
パイオニア
石川栄耀

石川 栄耀
いしかわ えいよう

PERSONAL DATA

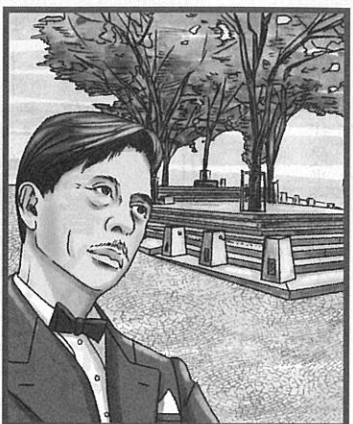
- 生没年：1893～1955年
- ゆかりの地：名古屋
- 主な功績：名古屋都市計画等
- 絵札背景：麻布十番広場

石川 栄耀

ISHIKAWA EIYO

豆知識

戦前から戦後にかけて日本の都市計画に大きな足跡を残したパイオニア。宮本武之輔と大学の同期であり、良きライバルであった。文学、絵画、音楽を愛し、自身の詩も残されている。名古屋の東山動物園に寄贈したカバのブロンズ像が残されている。



石川 栄耀
いしかわ えいよう

の建設 大都市疎開問題』、1944年)と綴っている。石川は常に都市計画家に対して、都市を学べ、味わいつくせ(『都市味到』)とはっぱをかけた。石川の都市計画思想は、都市に対する愛情と敬意に裏打ちされている。1954(昭和29)年正月の石川の年賀状には、近況報告として「戦後の日本の都市二百七十を全部見てしまふ、計画を樹てましたがまだ半分許り残って居ます。本年は五十許り片づけ度いと思つてます。日本の都市の面白さが解りかけました」と書かれていた。石川は、自分の都市計画家としてのキャリアを振り返り、改めて、欧米とは異なる日本独自の都市のありようを踏まえた都市計画を構築する必要があると感じていた。翌年の年賀状には「内地洋行中(予定三百都市半教済)」とある。順調に計画は遂行されていた。しかし、次の年、石川からの年賀状は届かなかつた。石川は1955年9月、出張先で倒れ、帰京後、9月26日に永眠した。

遺作に込められたメッセージ

1956年8月、石川の遺作が筑摩書房から出版された。志賀直哉ら監修の「小学生全集」の第84巻『世界首都ものがたり』である。石川は、この本で世界の首都のありようを説いた後、日本の首都、東京のありかたについて、小学生に向けて次のように語っている。

それなら、みなさんはどうしたらいいか? そ

れは、みなさんが、じぶんで考えるのです。あなたたちが、正しく世の中を見て、自由に考えることが、いちばん正しいのです。広い道路や高い建築は、お金さえあれば「いまのおとな」にもつくれます。ですが、すみずみまで太陽があたる首都人びとが、みな仲よくすむことができる首都安心して勉強することのできる首都 たのしい、美しい首都 というようなことは、どうしても、みなさんにやつてもらわなければなりません。

(中略)

世の中がすすむと、いままでのように、各国の首都の形がちがいはなくなるかわりません。しかし、それでも、よく気をつけて見れば、いまよりも、ずっと大きなちがいがあらわれてくるでしょう。それは、その国に長い歴史があり、科学が進めば進むほど、山や川、海や砂漠などを、その場所、その場所でもっとじょうずに利用し、一番いい首都をつくるでしょうからです。まねをするぐらい、おろかなことはありません。

これは60年後の私たちへのメッセージでもある。

「カルタ絵札イラスト」広野りお

(担当編集委員・鈴木三馨・山口剛士)

NAKAJIMA Naoto

1976年生まれ。東京大学工学部都市工学科卒、同大学院修士課程修了(博士(工学))。専攻は都市計画。主な著作に「都市美運動 シンクアートの都市計画史」(東京大学出版会)、「都市計画家石川栄耀 都市探求の軌跡」(共著、鹿島出版会)。

